

## スタートアップ研修

5月14日(土)に北九州市立大学の多目的ホールで「スタートアップ研修」が行われました。この研修には、今年度から421Lab.のプロジェクトに所属するメンバーを含めた約200人の学生が参加をしました。研修では、前年度から継続して活動を行っているメンバーからプロジェクトの細かい説明がなされ、その後、メンバー全員で前期の活動計画や目標決めを行いました。

今回の研修がメンバーの初顔合わせとなったプロジェクトも多く、まずは自己紹介やゲームでのアイスブレイクでメンバー間の親睦を深めました。



↓アイスブレイクをしている様子

↑全体の説明を聞いている様子



↓真剣に話を聞いている新規メンバー



↑昨年度1年間の活動内容や今後の活動について、新規のメンバーに共有している様子

その後は、各プロジェクトに分かれ、プロジェクトの目的や活動内容などについて、前年度からの継続メンバーと新規メンバーで共有しました。また、今後のプロジェクトの活動を通してどのような自分になりたいかといった個人の前期目標を決め、それに対する行動計画を立てていきました。今回の研修は、新規メンバーにとっては最初の一步を踏み出す大事な研修になったと思います。

地域活動を通して学びを得たいと考えている学生が、実に200人もいることは421Lab.の誇りです。その学生のやる気をこれらの各プロジェクト活動につなげていけるよう、学生運営スタッフとしてサポートを頑張っていこうと思いました。

(記事：河野)



北九州市立大学 地域共生教育センター (421Lab.)  
〒802-8577  
北九州市小倉南区北方 4-2-1 (北方キャンパス 2号館 1階)  
Open / 10:00-18:00 (月~金)  
[Tel] 093-964-4092 [Fax] 093-964-4088  
[Mail] info421@kitakyu-u.ac.jp  
[Web & Facebook & Twitter]

421Lab. 検索

《編集者：佐藤優香・河野真佑子・佐藤優奈》  
Lab. Times 06号 2016年6月6日発行

No.06  
2016 June

# Lab. Times



421Lab.

『Lab. Times』は北九州市立大学 地域共生教育センター 421Lab. が発行している広報紙です。

## 特集 熊本災害ボランティア派遣



### 災害時緊急支援チーム

災害発生時に行政や社会福祉協議会からのボランティア要請に迅速に応え、現地で様々な活動を行います。

421Lab.では、5月2日(月)~5月5日(木)にかけて、学生・教職員全19名が『災害時緊急支援チーム』として熊本市災害ボランティアセンターの運営業務支援の活動を行いました。この支援活動は、北九州市社会福祉協議会と熊本市社会福祉協議会からの支援要請を受けた421Lab.が中心となって実施されたものです。

今回の派遣活動では、現地で必要としているボランティアの人数確認や作業内容の変更などの確認を行う「ニーズ班」、ボランティア依頼表を元にボランティア希望者との調整を行う「マッチング班」、依頼表に書かれた資材の準備と受け渡しなどを行う「資材班」、災害ボランティアセンターの運営全般を行う「総務班」、ボランティアに来られた方の受付やボランティア保険への加入手続きなどを行う「受付班」などに分かれて活動を行いました。421Lab.では6月の各週末も引き続き支援活動を行う予定です。

## 編集後記

今回のLab.Timesでは、災害時緊急支援チームをメインに取り上げました。取材をする中で、皆さんにぜひ伝えたいと思う内容が多く、どうまとめるかが難しかったです。また、私自身も取材を通して多く考えさせられました。この記事を読んでもらい、皆さんが少しでも関心を持っていただけたら嬉しいです。



編集長：佐藤優香

《プロフィール》  
経済学部経済学科 2年。  
愛称はペンちゃん。  
421Lab.の Mascot 的存在。  
趣味はアニメを見ることで、最近の一押しは「甲鉄城のカバネリ」と「ご注文はうさぎですか?」



「防犯・防災プロジェクト」のメンバーで今回の熊本派遣活動に参加された近藤さんにお話を伺いました。

# つなぎつながる支援の輪

普段は 421Lab. のプロジェクトメンバーとして活動し、熊本災害ボランティア派遣でも活動を行った 2 人に活動を行った感想を伺いました



「東日本『絆』プロジェクト」のメンバーで今回の熊本派遣活動に参加された大庭さんにお話を伺いました。

## Q1. 今回の活動に参加した動機は何ですか？

「これまでの災害ボランティアの経験を活かして、支援ができれば」と思ったからです。私は 2014 年に起こった広島のと砂災害の時に 421Lab. を通じて被災地に行きました。そこで災害ボランティアセンターの運営に携わらせて頂きました。この活動から、ボランティアセンターの仕組みを知ることができました。そのような経験を活かして、何か被災者の方の力になればと思い、参加を決めました。

## Q2. どのような活動を行いましたか？

朝一番に「今日何っても大丈夫ですか」と被災者の方に確認の電話を行いました。それに加えて被災者の方の状況を想像しながら他にも要望があるかを聞き出し、よりよい支援ができるよう努めました。

現地での活動については瓦の撤去など力仕事が多いイメージがあると思いますが、しかし、力仕事だけが支援ではなく、被災者の方に寄り添う支援も必要です。被災者の方にはボランティアの方に指示をするようお願いしていますが、初めて会った人との会話は大変だと思えます。でも、そのときに寄り添えるボランティアの方があると、指示だけでなく「あのときはこうだったんですよ」と当時の様子を話したり、被災者の方の心情面に配慮することにつながると思えます。そのため、私は被災されている依頼者と現場に向かうボランティアのニーズが合い、スムーズに進むように確認を逐一行うことを心がけました。

## Q3. 活動の中で大変だったことはなんですか？

活動をしていて大変だったことは 2 つあります。1 つ目は情報量が少ない中、いかにその場にあった判断ができるかということです。

2 つ目は、ニーズ合わせをしているときには気づかなかった情報のずれが起きることです。実際に現場に行くと、事前に言われていた活動内容と違ったり、被災者の方に対する配慮が足りなかったりしたことがありました。一方的なボランティアだと一方通行となってしまうことがあり、被災された方にとって「こんなはずじゃなかったのに...」ということが起きてしまいます。これは大きな問題でした。

→ ボランティアの方から  
お話を伺った近藤さん



## Q4. 活動を行ってよかったことは何ですか？

自分自身が嬉しいと感じたことは、被災された方から直接「昨日ボランティアさんが来てすごく良くしてもらったんですよ」というお礼の電話を貰ったことです。そして、そこから「また困ったことがあったら言ってくださいね」といった会話ができただけでも、活動をしていてよかったと感じた点ですね。

## Q5. 最後に感想をお願いします

これから支援したいと考えている人は、公的機関で発信される情報を集め、ボランティアに必要なことや現地の状況を知っておくと活動しやすいと思います。

また、自分が被災の犠牲者、負傷者にならないことも大切です。自分が被災したらどうなるかを想像して、家の家具の配置や身の周りに気を配り、もしもの時に備えているといいと思います。

421Lab. の「防犯防災プロジェクト」のメンバーとして、熊本の被災した現場を直接見て「被災したらこうなる」という感覚を北九州で共有し地域防災につなげていきたいです。



### ●近藤 涼太 (こんどう・りょうた) 法学部法律学科 3 年

2014 年～現在、防犯・防災プロジェクトに所属。現在はプロジェクトのリーダーを務め、他大学の学生や社会人の方とのつながりを広めるなど、プロジェクトの活動に積極的に取り組んでいる。

### ●防犯・防災プロジェクトとは ...

「安心・安全」をテーマに防犯と防災の 2 つの観点から地域の方と活動を行い、「自分たちがこの地域を守るんだ」という意識を共有できるきっかけ作りを地域の方や学生に向けて発信しているプロジェクトです。

## Q1. 今回の活動に参加した動機は何ですか？

私は熊本地震が発生した時から、考えるよりも直感で「行きたい」と思っていました。理由は 2 つあります。

1 つ目は幼稚園時代を熊本で過ごしていたからです。2 つ目は、大学に入学して「東日本『絆』プロジェクト」(旧: 東日本大震災関連プロジェクト)として東北への「派遣活動」に 4 回参加したからです。「派遣活動」では、プロジェクトの活動の一環で実際に東北へ行き仮設住宅に住む高齢者の方と交流を行うなどの活動を行って来ました。この活動を通じて、現地に行き自分の目で被災した状況や雰囲気などを確認することに意義があると感じたので、今回の活動に参加しました。

## Q2. どのような活動を行いましたか？

私はボランティアを依頼された被災者の方々へ確認の連絡を行う「アボ電話」という仕事をさせて頂きました。

ボランティアセンターの活動では被災者の方と直接話せる機会は少ないですが、アボ電話はボランティアの方々が活動を行うよりも早く、被災者の方と電話を通じて直接お話しすることができます。だから、電話をかける時は業務連絡だけでなく「お体大丈夫ですか」「不安なことはないですか」と話しかけるよう心がけました。すると「実はね ...」という風にお話を下さることも多くありました。少しでも被災者の方に寄り添い、このようにお話を聞き出すことも大事なのだと思いました。

## Q3. 活動の中で大変だったことはなんですか？

私はとにかく「熊本に行きたい」と思っていたので、自分の気持ちを抑えることが大変でした。

また、活動を行ってから大変だったことは余震が続いていたことです。東日本に対する支援は、地震の発生から 2・3 年経ってからの活動だったので余震もなく比較的落ち着いており、東北での被災者の方に寄り添う活動でした。しかし熊本では余震が多く、危険と隣り合わせで、活動を行う時は注意しなくてはならないと思いました。



← 現地での活動の様子

## Q4. 活動の中でよかったことは何ですか？

2 つあります。1 つ目はアボ電話の際に、ご年配の女性から「本当にありがとう、本当に助かった」と言われたことです。その電話でのやりとりから、ボランティアセンターで活動するやりがいを感じました。

2 つ目は「災害時緊急支援チーム」として大人数で活動に参加できたことです。メンバーがまんべんなくそれぞれの部署に分かれたことで、ボランティアセンターの中での流れをチーム全体で把握することができました。

## Q5. 最後に感想をお願いします。

私は全ての地域が被災をした東日本大震災をイメージして活動に臨んだので、熊本地震で被災された家を実際に見て驚きました。

また、熊本市のボランティアセンターは市内中心地に開設されており、近くには商店街もあります。ボランティアセンターには多くのボランティアの方が並んでいますが、道を挟んだ商店街では地元の方や観光客の方がいて賑わっており、同じ災害でも状況や特色が全然違うのだとあらためて思いました。

だからこそ、北九州で災害が起きた時はどうしていかなければならないのか、今回の活動から得たことを活かしていきたいです。



### ●大庭 亜美 (おおにわ・あみ) 地域創生学群 3 年

2014 年～現在、東日本『絆』プロジェクトに所属。現在はプロジェクトのリーダーを務め、日々北九州と東北の両地域をつなげるための活動を積極的に行っている。

### ●東日本『絆』プロジェクトとは ...

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に対して、その記憶を風化させないために、そして、東北が元気になるために北九州の地から東北支援を行うプロジェクトです。